
第一一〇戦記

Dr.スポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一一〇戦記

【Nコード】

N4163Y

【作者名】

Dr. スポ

【あらすじ】

くだらない戦争に、最高の幸せをそえる

？ 全ての始まり、プロローグの場合（前書き）

歩み始める

欠けていると知りながら

足りないものを補うために

? 全ての始まり、プロローグの場合

世界を二度の大火が焼き、長い時間が経過した。

今や当時を実際に知る者はおらず。しかし、知らぬが故に繰り返さぬよう記録が残る現世。

人が種族ではなく。世界共通パス 通称：顔パスというIDを身体に埋め込むことによって、個人を特定するようになった時代。

最早、技術の進歩によって戦争が資源の無駄使い！！ と評される今。それでも、軍隊という概念が消えることはない。

あまりに滑稽。体裁と見栄の衝突から生れる利権に群がるバカは、そうそう消えないのだ。

クリーンで恒久的な平和を望み、されど矛盾を抱えた軍隊とくにを用意する。

望まれぬ彼らの、戦闘と信念と友情の話これから語って聞かせよう。

「と言うコンセプトの劇を、幼稚園でするように上層部から指令がきたのだがね。彼らは、我が部隊を昔の『ケーサツ・コツーカー』と勘違いしているようだよ?」

やれやれ。と九名の前で、一人の男が首を振って見せた。その手には、二人の兵士が熱く包容をかましている絵の描かれたフリップが掲げられている。

彼は、世界共通軍隊・ノースウィンド（略称NW）所属の第一〇小隊長だ。

北国で吹く極寒の風の如く、敵へと厳しい攻撃を仕掛ける。と言う意味と同時に、経済へも極寒を運んでくるだろうと皮肉ありありな二つ目の意味も持つ軍に属するこの小隊は、総員が一〇名。

小隊長を除く、残りの九名が全員女性というかなり奇抜な編成と
なっている。

諸処の事情から頭へ包帯を巻いている隊長が、持っていたフリッ
プを適当な所へ放り投げた。

「まあ、こんなものはしたくなくなくても問題ないよ。最悪、
子供達と楽しく遊べばいいね」

そんな事よりだ、と前置きした隊長はわざとらしい咳払いで視線
を集める。

レクリエーションルームに集合させられた総員は、各々が好きな
ように立ち位置を決めて話を聞いていた。

座っている者もいれば、立ったままの者もいる。床に座り込み、
椅子を引つ張り出し、壁を背にもたれ掛かり、手持ち無沙汰に突っ
立ち、姿勢を正して、背中を曲げて、寝そべって。

様々な反応がある中で、しかし彼女らの視線の先には一人がいた。
疑問の意思表示を見せる彼女たちに、その『一人』は満面の笑顔
を返しつつ。

「今日から皆と一緒に行動する仲間が増える。所謂、転校生だね？
と言うことで、本人を紹介する前に聞いておきたいのだが。誰か、
今朝方にパンをくわえたまま走って曲がり角で人と衝突した者はい
るかね？」

どうかね？ と割に真剣な表情で、瞳に期待の色を見せる隊長に
失笑の心えがきた。

いつもの変な事言う隊長だあ。と幼い体格の少女が笑み。軽い病
気ですね。と長い黒髪を揺らす女性が静かに笑う。以下、七名がそ
れぞれに笑う反応を見せたことに満足した隊長は頷き一つ。

入りたまえ。とレクリエーションルームのドアへ向かって声を掛

ければ、そこから影が生まれた。

小柄な女性のものだ。

腰まであるブロンドの長髪は、彼女が軍靴でリズムを刻む度に宙を舞い。険しく顰められた目の奥に、暗い色の碧眼が光を宿している。肩に羽織っている短い指揮者マントには、彼女が『少佐』である事を証明する階級証。

この小隊内では、隊長の次に高官だな。と隊員たちがそれぞれに思う中、不意にその動きは来た。

動きの正体は、綺麗な後ろ回し蹴り。つまり、マーシャルアーツ（軍隊格闘術）に長けた者の動きだった。

なっ?! と周りが状況を理解する頃には、その足が隊長の頭へ目掛けて殺到する。九名は、その内の一名を除いて誰も反応することが出来ない。

距離的に遠すぎる者が焦り、戦闘に向かない者が呆然として、不意を突かれた者が身を竦ませている。

その中で、壁に寄りかかっていた長身の女性だけが動いた。栗色の長い髪が尾となり、高速で身を飛ばす軌跡を作り上げる。

距離は五メートル。三步でそれを無に変えて、編み上げブーツで固めた足が振り上げられた。

少佐の足を迎撃する軌道。後出しである不利を埋めるほど高速な機動。

快音が響く。

迎撃は成功した。蹴りの軌道をズラしてあらぬ場所へ着弾させ、一步の後退すらしなかった隊長を庇う位置に女は割り込む。

暗い色の碧眼を睨み返すのは、艶やかな紅だ。鮮やかな朱ではなく、深く濃い色の紅に染まる双眸が高官の少女をロックする。

仮にも上官だが、そんな事はどうでもいい。殺意の段階を三段飛ばしで跳ね上げ、濃密な気配を彼女は自らの内側へ満たしていく。

後は爆発させれば完璧だ。その身は自身の意識とは別の所で、目の前の少女を反射的に殺すだろう。紆余曲折あって隊長に付いて行

くと決めた以上、彼の安全は何が何でも守ってみせる。それが彼女の守るべき矜持の一つだからだ。

上官殺しには銃殺刑が待っているだろうか。そんな刑に対する恐怖心が一瞬だけ頭をもたげ、しかし「だからどうしたっ!!」と内に響く声が全てを風払う。

決意を胸に必殺の一本踏み込もうとした彼女は、動こうとしたのと同時に背後から別の動きが来るのを理解する。

当然、背後に隊長以外がいるはずもなく。果たして、彼の手は後ろから紅い目の女を抱く様にして行動を制限してきた。

くつと喉を鳴らすような笑みを響かせる隊長は、彼女を離さず少佐を見て。

「どうかね？ 少佐」

「ああ、面白いな。聞いていた通りだ」

ふふん、と鼻を鳴らす少佐が満足げに笑みの形を作って頷く。

応えるように頷き返す隊長は、そこでようやくと居心地悪そうにもぞもぞしていた女を解放した。代わりに、身構えて静観している全員へと視線を送った。

右腕が勢いよく真横へ振られるのに呼応して、服の袖が小気味良い音を鳴らす。それは、隊長が何らかの宣言をするときの前動作だと彼女らは知っていた。

故に言葉を聞き逃さぬよう、耳に神経を集中させて聞く姿勢へと全力を注ぎ。同じく、彼女らが聞く姿勢になっていると理解した隊長は頷きの後に言葉を作った。

「第一 小隊長、七海八雲の名の下に宣言しよう。現時刻を持つて、これまで空席であった我が隊の副隊長へ少佐が着任する事となった。異論は認められない。これは、大佐という私の権限を最大限に利用した決定事項であるっ!!」

なっ?! と異口同音の音が八つ、レクリエーションルームの中で紡がれる。

横暴な言葉だね、と困ったように笑む。隊員たちの驚きに答える八雲は、しかし言葉と裏腹に撤回の言葉を口にしない。決定を曲げる気はないと、そう言うことなのだろう。

「ナツキ衛生兵」

だから八雲は、他の意志が付いてきていない事を知りつつも話を先へと進めていく。

隊員の中で唯一驚かなかった衛生兵へと、八雲は視線を送った。はいと応えて一步前へ出るのは、三つ編み眼鏡の女性である。大きめの丸眼鏡を押し上げ、うむと頷く八雲に苦笑を返し。

「損な役回りですね、隊長」

「何、構わないよ。それもまた、私の役回りだしね？ それよりも、君は少佐と同期だったらしいじゃないか」

ええと微笑みで答えるナツキに、ではと言葉を繋いだ八雲は続ける。

「着任したばかりの少佐は、まだこの辺りに不馴れだね。君に案内役の任を与えよう。復唱したまえ」

「了解しました。これより案内役の任につきます」

軍靴を鳴らし、敬礼の姿勢で復唱してからナツキは少佐を引つ張って退出した。残されるのは理解の追いつかない隊員と、どうしたものか迷う隊長だけ。

さて？ と言葉を選びながら八名へ視線を送り、そこで声が来る。

一番近い音源は、先ほど少佐と短い攻防を繰り広げた女で。この隊のエースと呼べる存在だ。

ちよつと、とか。なんで？ とかを小さく呟きながら、険しい視線が八雲に向く。

「不満は、この場で全て聞こう。この先、少佐へ向けられるだろう不満をね？ だから、このことに関して彼女に文句を言っただけはない。何せ、これは私の権限による独断なのだから。ね？」

不満はあるかね？ と八雲が視線を回す先。ゆつくりと横へ流れる視界へ、順に隊員たちの姿が入ってくる。

一人一人と丁寧に視線を合わせていけば、彼女らは首を横に振る答えを寄越した。

隊長がそこまで言うなら、と肩を竦める者。アンタの決定には従うさ、とぶつきらばうに言っただけひらひらと手を振る者。

それらの答えを得て、頷く八雲の視線が最後に行き着いたのは紅目の女だ。

唇をきつく引き結び、手が白くなるぐらい強く拳を握る彼女へ八雲は手を伸ばし。

「良くないね、坂本アヤカ伍長。それ以上は、綺麗な爪が割れてしまつよ？」

握られた拳を解くように優しく取り、しかし手は拒絶を持って容易く振りほどかれる。睨み付ける紅の目と一緒に来るのは、間違いなく抗議の言葉。

なんで？ とかすれる声で一度目が紡がれ。

予想以上に、自分の声がハッキリしない事実へ身を強ばらせたアヤカは。それでも、次の言葉はハッキリした声で紡ごうと二度目の音を紡ぐ。

「なんで？ ずっと、副隊長の席は空けとくと思ってたのに……これじゃあ、あの人の帰る場所が無くなっちゃうー!!」

「そうだね。だが、何時までも機能しない役職を放置することは出来ないのだよ。いずれは、上層部が我が隊の副隊長に身勝手な者を任命するだろう」

本当に勝手だね、と失笑する八雲はアヤカの髪を梳くように撫でる。

「この隊は、楽しくなくてはいけない。だからこそ、上官からの任命で来る身勝手な副隊長を受け入れる訳にはいかないからね。彼女の居場所を奪ってでも、この隊を楽しくあるように私は尽力するよ？」

それが約束だからねと心の中で呟く八雲は、再び視線を全員へ巡らせ。更に右手を振って袖を鳴らし。

「宣言しよう。少佐が来ることによって、楽しいこの隊がいつそう楽しく成ることを!! だから、彼女の居場所を奪ってまで私が少佐を据えたと言うことを!! 必要であれば、私は幾らでも悪であることを!!」

くつと喉の奥から笑みを漏らす八雲は、ここにいない誰かへ語りかけるように口を動かす。

見えているかね？ と前置きして。

「これから、我々はますます楽しくなっていくよ？ 早く帰って来ねば、流行に乗り遅れてしまつかもしれない程にね」

はの音の連続で笑う八雲の音が、レクリエーションルームの中に響き渡る。

十

大きめの丸眼鏡を押し上げ、三つ編みに結った髪を揺らし進むナツキに連れられて歩く少女　九条晶くじょうあきは、先日第一　小隊へ誘ってきた意味不明な男の事を思う。

と言つても、色っぽい話ではない。単純に、どんな思惑があつて自分をここへ連れてきたのかという事について思いを馳せているのだ。

彼女の家系。九条家とはヘイ・アンだかヘイ・ジヨウだかの、まるで人を呼ぶ様な名前の時代から栄えているらしい貴族の家柄である。

つまりそれは、絶えず責任を負うととなり公平な政をこなさなくてはならない。将来、この世界の在り方を担っていく立場に付くという片道切符でもあつた。

幸いにして私の祖父は立派な人間だ、と晶は思う。

例え自らが悪役に仕立て上げられたとて、その不正ごと全てを公平にぶつた斬つていく豪快な老人。それが彼女の祖父であり、目標としている人物だ。

本人は既に八〇歳も半ばへ差し掛かりつつあるが。医療の進歩と人間離れた肉体を保有する老獪は、未だに現役で各政治家を震え上がらせている。そんな祖父を持ってして、第一　小隊長は「愉快的男」と賞される存在だった。

そればかりか、彼に第一　小隊へ誘われたと私から聞かすや否や、祖父は口の端を盛大に歪めて、その常から凶悪だった笑みを五割り増しの威力で発揮して電話を掛け始め。

普段の厳格な言葉遣いなど微塵も感じさせない「やつほー、やつくんお久々」から始まり。最後の「おkおk。んじゃあ、そんな感じで手配しとくから。あとよろ」で終わるまで、晶を恐怖のどん底へ追い込んだのである。

それは一瞬、本気でここにいるクソ爺は誰だ？　と思ってしまったくらいで。とうとうボケたか、或いは無理が祟って脳味噌が溶けたか。何にせよ、私が引導を渡して差し上げねばと覚悟を決めて銃へ手を掛けた所までいってしまっただけ。

下手をすると、トラウマになっていたかも知れない。

「うむ、話は付いた。細かな手配は彼がしてくれるそうだ。明日にでも隊舎に来るよう言うておった。着任期間は一年間、その間に多くを学んでくるが良い」

有無は受け付けんと一喝する祖父は、いつも通り威厳に溢れた老獺の顔だった。

斯くして九条晶は第一　小隊、出向副隊長として着任したわけである。

「それにしても九条少佐。まさか、蹴るとは思ってたわよ？」

晶へ嘆息混じりに言葉を送るナツキは、白いリノリウムの廊下を先行して歩いている。近年確立された技術によって、壁そのものが淡く発光している廊下に電球などない。

言うなら、この廊下そのものが通路であり照明だ。

そんな全体から均等に照らされる空間の中で、晶は首を傾げる。

「ん？　事前に知らせてあったる？」

「私は、面白いかどうかを確認するとしか聞いてません」

不思議そうな表情の少女に、拗ねたような咎めの言葉を送りつつ先へ進む。

いま向かっているのは、晶が副隊長として使う事になる私室だ。隊長室、食堂とアバウトに隊舎内の間取りがわかるように歩き回り、その生活空間が案内の最後の場所となっている。

これから最低でも一年を過ごす場所だ。

「だいたいね。この第一一 小隊で、隊長への暴力とか自殺行為よ？」

わかってる？ と問うナツキに、晶は待ったをかけた。

自殺行為？ とオウム替えしに言葉を紡ぎ、その意味を考える。

確かに事前の打ち合わせがあつたとは言え、あの殺人キックの前で微動だにしなかつたのは賞賛できる。

しかしだ。もしかすると、あれは身が竦んでいただけかもしれない。反応速度が追い付いていなかっただけかもしれない。もしそうだったとするなら、さした脅威になる事などないだろう。

そもそも、あの奇妙な男がそれほど強いとも思えないのだが。とそこまで思考した晶に、ナツキの追加台詞が来た。

「アキ。あなた、一瞬で隊の八割を敵に回したわよ？」

同期のナツキが、彼女を『アキ』と呼ぶときは何かしらの意味があるときのみである。そして、その意味を悟った晶はふふんと鼻を鳴らし。

「という事は、あの紅目みたいに反抗してくるのが後七人はいるのね？」

面白そうだわ、と呟く同期を背後に吐息して歩きながらナツキは

続ける。

「ここにいるのって、みんな隊長が引き抜いてきた人達ばかりなのよ。前の副隊長と隊長が、ぐるになつて人員確保したわけ」

そう切り出したナツキの言葉を、晶は聞く。

内容としては、要約するとこんな感じだ。

つまり、当時人員不足から機能していなかった第一一 小隊。それに目を付けた二人組の男女がいて、そこへ能力重視の人員をかき集めたと言うことである。

当然。能力重視であつた為に問題児や差別視されていた者ばかりが集まり、結成当初はかなり異様な隊であつたらしい。

今でも十分に異様な隊が、昔の方がさらに異様だつたとは驚きだ。隊の正式結成が六年前。纏まりが無かつたのも初めの一年のみで、後の四年間は多くの功績を残す『ワンマンアーミー（孤独の小隊）』などと囁かれる存在にまでなっている。

能力が高いたけの隊員たちをかき集めたのが前副隊長。

集まつた隊員たちを説得し、認め、居場所を与え、と一つに纏めたのが現隊長。

二人の内どちらが欠けても成り立たなかつた第一一 小隊は、むしろ一つの家族にも近い存在へと昇華しているわけだ。

「で、そのお母さんの立ち位置の副隊長が、去年上層部からの強制で異動になつたの。只でさえ母親の居場所を取られて気が立ってるのに、あんな事したんじゃ冗談で済まないわよ？」

ふーん。と気のない返事を返しながら、漠然と自分の状況を理解した晶は。そこで、ふと疑問が浮上する。

目の前の同期は、この隊がある種の家族だと言つた。その言葉に違わず、今の晶にはこの隊の全敵意が向けられるだろう。なのに、

なのだ。

この隊に 家族に所属しているナツキから敵意が来ないのは不思議だ。

何故だろう？ と不思議に思う正面。大きめの両開き扉を差した本人は、これが副隊長室ねと説明しながら振り返り、不意に怪訝な表情となった。

なに、どうしたの？ と聞かれ、いやと言葉を繋ぎ。

「ナツキは、あんまり怒らないな。と思って」

「あら、怒ってるわよ？ 私は小隊の衛生兵長だもの。あなたとみんなが喧嘩して怪我したら、治療は私がする事になるんだから」

苦笑混じりな言葉を続けて、それに、と前置きしたナツキは困ったような表情のまま。

「私はアキの次に新参者だから、ここに来たのも二年前よ。前副隊長とは一年しかいらなかったわ。だから、他の子達よりも薄情なのかもね」

目を細め、静かに言ってみせるナツキには哀愁がある。

仕方ないよね、と付け加えた言葉は声が僅かに上擦って震え、まるでダムが決壊する寸前のような雰囲気があった。

どう声を掛けようか迷う様に、視線を俯けて考える。とりあえず当たり障りのない事を言おう、と晶が視線を上げた先。そこにさっきまで無かった風景が追加されている。

ナツキの背後にいる風景は人の形をしていて、且つ腕を一杯に開いた状態であり。

「そんな事はない。そんな事はないんだよナツキ衛生兵！！」

刹那。声と同時に抱擁がナツキを襲う。

がばあ！！　と抱きついたそれは、言うまでもなく七海八雲だ。驚きからナツキの絹を割く悲鳴が鳴り響くが、彼はそれを気にもしない。

そんなに寂しいのなら、私の胸に飛び込んでおいでー！！　とか言いながらがちりホールド状態の変質者へ向けて、晶は全力且つ的確な蹴りを無言で叩き込んだ。

あとは、推して知るべし。というやつだ。

隊長&オールマイティ

ななみ やくも
七海八雲

変態　愉快な男

階級、大佐

現・副隊長

くじょう あき
九条晶

回し蹴り系男勝り少女　九条家令嬢

階級、少佐

元・副隊長

????

お母さん

階級、？

フォワード1

坂本アヤカ（さかもと　あやか）

迎撃キック 接近戦最強

階級、伍長

通信士

???

衛生兵・補佐

???

フォワード2

???

陸上特殊車両運用兵士&メカニック

???

航空特殊機体運用兵士&メカニック

???

後方支援1

???

後方支援2

???

衛生兵長

飯塚ナツキ(いいづか なつき)

三つ編みの常識人 晶の同期

階級、曹長

？ フォワード1、坂本アヤカの場合（前書き）

掴んだものは何なのか

掴めたものは何なのか

それを確かめなくてはならない

？ フォワード1、坂本アヤカの場合

坂本アヤカは、新しく副隊長へと就任した九条晶を信じていない。それどころか認めてすらいない。

この一一〇小隊で初めての隊員は彼女だ。故に彼女は設立当初から席を置く人間であり、現隊長の七海八雲と元副隊長が仲睦まじく殴り合いをしていた頃から知っている。ついでに言くと、二人が着任時に青痣だらけの姿でやってきたのすら見ていた。

しかし、これは正確ではない。本当の事をいうのなら、アヤカは二人よりも前から一一〇小隊にいたのだ。

二人が来る前の一一〇は酷かった。

どこぞの政府で失敗した官僚が天下り同然で逃げ込んできたり、民間警備会社の社長が上層部へ取り入る為のワンステップとして着任したり。まともな上司がついたことなど一度もない。

現行の戦争とは、利権の奪い合いによる副産物であるために非虐殺を謳ってはいる。しかし、いくら世間がクリーンな戦争に切り替わったとはいえ、死ぬ時は死ぬし怪我もするのだ。

あくまで、極力殺さないだけ。必要以上に殺さないは、白旗を上げるまでは殺し続けるのと同じ意味である。

実際、無能な上司の言葉一つで、アヤカも足を失っていた。

当時の事を思い出す。

心の支えとなる根幹の部分。劣悪な泥沼の中から、引き上げてくれた手を掴んだ日の事を。

暗転した視界が復帰したときには、目の前が焦土と化していた。砲弾だろつか、もしくは敵兵の固有武装かもしれない。とりあえず、何かの兵器が利用されたのだろつか。この平原は、そうやって作られたに違いない。

肺が焼けそうなほど痛いのは、熱波をもろに吸ってしまったからか。ふらふらする思考が、記憶修復と状況判断の邪魔をする。

「う、あ……」

誰かと言おうとした喉が、意味のある言葉を吐き出さなかった。呻くような声を連続して、ざらざらとした感覚が伴い咳き込んでしまふ。

気付けば、どろりと粘つく赤を地面に吐き出していた。荒い息をのみ込もうとして、更にもう一度吐き出す。

地獄だ。どうしてこんなわけのわからない場所で、わけのわからない言葉の為に苦しんでいるのだろつか。仲のよかった同僚たちもいつのまにかどこかへ異動になったり居なくなったり。自分だけ残された様で泣きたくなる。

だが、感傷に浸っている場合でもない。

単独行動をしていたにもかかわらず、ここをピンポイントで狙われたという事は。つまり、居場所が筒抜け状態だと言うことだ。長居すれば、今度は死亡確認の敵兵がやってくる。

(早く逃げないと)

肩に力を入れ、膝をつこうとしたところで体勢が崩れた。疑問を抱く間もなく、体が仰向けに投げ出される。

痛みを感じない。強かに打ち付けた背中、肺から空気を追い出すだけで痛覚が遮断されているようだ。もつと言うなら下半身、太腿よりも先の感覚が消え失せているという事に、今更ながら気付か

された。

これはまずい。走れなければ、すぐにも敵に追いつかれてしまう。慌てて腰の医療キットへと手を伸ばし、中から違法すれすれの興奮剤を取り出す。

この隊で配られた、正規の支給品だから笑える代物だ。

使うのは嫌だが、これを足に注射すれば感覚が戻るかもしれない。いや、もし戻らなかったとしても動くようになるだろう。この場を生き延びるためには必要な処置で、仕方ないことだから。

心の中で、何度かそんないいわけを繰り返しつつ体を起こす。

あとは、足の動脈に注射を

「……………え？」

声が出ていた。それが自分の声だと理解するのに、五秒ほどの時間がかかる。

無い。無かったのだ。感覚が消えているのではなく、そもそも太腿から下は何もついていなかった。これでは、感覚どころの問題ではない。

停止した思考が、ぐちゃぐちゃのまま再起動しようとしている。

ダメという言葉を見無視して、わからないことをわからないままにした脳が動き出そうとしている。

どうなるか予想できるといふのに、状況判断も行わずに感覚が再接続されようとしている。

次の瞬間には、悲鳴が上がっていた。

誰の声だ。私のだ。

帰ってきた痛みと理解の追いつかない世界とに、両側から挟まれて押しつぶされる。ペしゃんこになってしまったら、きつともう戻ってこられない。

誰か。誰でもいいから助けて。

「劇的なタイミングだね。いや、狙ったわけではないのだが」

不意に、誰かの声を聞いた。

涙で歪み、揺れ動く視界の端に影がある。

大丈夫だよ、私が出来たからもう安心だね？ という男は、手に持った注射器を首へと差し込んだ。

柔らかな微睡みで包まれるような感覚に襲われ、そこで意識は完全にとぎれた。あとはただ暗闇に抱かれて、暖かな体温に全てを委ねるだけ。

緩やかな、これが死なのかと思った。

十

目を覚ますと、見えるものは殆どが白かった。

天井も壁も、照らされているライトも。銀の器具とそれを操る緑服の人間だけが、室内で浮いているように感じる。

『やあ、お目覚めかね。悪いが、体の負担も考えて局部麻酔のオーダーを出させてもらっているよ』

声 came。聞いたことのある声だ。

足を無くして、死んでしまったときに聞いたもの。それが、小さなノイズを含んでスピーカーから溢れ出る。

音源は、白い部屋の四隅だ。声に反応した緑服が顔をのぞき込んできて、頷くと壁に向かって手を振りだす。そちらに、音源の発生源があるのだろうか。

『いや、流石だねウイルオウィプス（嫌われ者）君。助かるよ』

「カカツ！ あんたには借りもある。気にするな。ついでに、こっちの新技术を採用してくれたから、また借り一つ作っちまったが。あれ？ これイタチゴッコじゃね？」

疑問のままに首を捻った緑男に、はの連続で笑う声が答える。返事になっていない言葉を横に置き、声は優しく話し始めた。

『坂本アヤカ君。過酷な日々だったね、苦しかっただろうね、そんな君を可哀想に思うよ。なんて無責任な事を言うつもりはない。ただ無言のままに道を示し、無闇に無くしたものの代わりを与え、無駄に力を付与しよう』

ゆつくりと丁寧な発音される言葉が、一言も漏れることなく耳を犯す。

それは、聞く気がなくても無理矢理に割り込んでくる声だった。逃れようはなく、そして、それは同時に放り出す声でもある。ずっと求めていた、助けてくれる誰かではないという証明の声。

淡々と、声は続けて言葉を紡ぐ。

『好きにしまえ。助けたのは、ただの慈善事業でね。望むのならば、新しい配属先を紹介してもいい。我々は、今後の君がどんな方向を目指しているかが一切関知しない。また、外部の人間に関知もさせないから安心しまえ』

何事も中途半端はいけないからね、と付け足された言葉の意味が理解できない。

どうして誰も助けてくれないのか。中途半端でもいいから、一時的にでもいいから、多くを望みはしないから。だから……

「や、あ……」

思わず、言葉にもならない音が漏れていた。喉の奥、肺を押しつけそうなほど動いている心臓から声がくる。

いやだと、もういやだと訴える声だ。それは涙を伴って、意味のある意志に変わっていく。

「やだ……もう、一人はやだ。誰か……誰でもいいから、一人に、しないで」

手を伸ばす。掴んでくれる人を探して、行き先に迷った救いが立ち往生している。

どこに行きたいのか、どうしたいのかすらわからない幼子の駄々だ。自分の子供でもないのに、わざわざ振り向いてくれる人間がいるわけもない。

それならば、と思い。

「家族が。温かな、家族が欲しい」

ぼつりと出た言葉の意味を噛みしめて、それが叶わないものだと理解していた。

そもそも、この利権争いの軍に所属した理由が『孤児だったから』である。生きていく上で必要だったから、路地裏で野垂れ死に直前だったところを軍へ志願したのだ。

当時は、年少時から優秀な軍人を育成するというプログラムに感謝もしたが。だが、それが今に結びついてしまったのは皮肉だろうか。

「お父さんと、お母さんが欲しい。兄弟も姉妹も、私を持ってなかった温もりが全部欲しい！」

欲張りだろうか、という思いが頭を上げそうになる。こんなに望んで、叶うはずのない思いをどこに押し込めるのかという不安もよぎっていく。

結局は手には入らないものを要求して、意味などあるのか。止まらない嗚咽混じりの呼吸を乱して、何かすぎる物を手探りに探す。足がないのだ。ならば、どこにも行けない。すぎる物を求めるところか、もう孤独から逃げることも出来ない。

「全部、欲しいよお……」

最後の力を振り絞った声は、やはり行き場がわからずに迷っていた。

ずっと一人でいられるほど頑丈ではない。きつと、どこかで動かなくなってしまう。それも、誰が気付くこともないままに一人きりで。

いやあ……やだあ……と駄々が溢れ出し、滲む視界が暗転していく。

孤独だった。助けなどない、怖い世界に放り出されてしまった。顔を覆い、耳を塞いでうずくまりたくなる。

「それが、君の願いかね」

静かで優しい声が、すぐそばに来ていた。戦場で聞き、スピーカ―越しだった声が隣に立っているのを感じる。

「では、君の望みを叶えようではないかね。今日から、私が父親だ。母親もちゃんというし、時期に兄弟・姉妹は増えるから心配いらないね」

「なに、言って」

戸惑いでぐちゃぐちゃになる思考を落ち着けるために手が来た。髪を整える動きで、頭を数度撫でられる。

温かかった。これまで感じたことがないほどの安堵感に、全身の力が抜けていく。

「よく頑張ったね。アヤカ君、君は実に優秀だよ。これまでたった一人で、よくぞ耐え抜いた。そんな娘が持てて、私は誇りに思うよ。だが、もう我慢の必要はないね」

停止した脳の隙間へ、滑り込むようにして声は続ける。

抱き抱えられながら上体を起こされ、邪魔な涙も大きな指で払われた。人の体温に体重を預けながら、正面　かつては足があった場所を見る。

「優秀で寂しがりな我が娘へ、親バカな父としてはプレゼントがしたくてね。無くしたものの代わりを用意させてもらったよ。今度は逃げるためではなく、みんなで歩くために使ってほしいね」

そこに、足があった。意識すれば、ぎこちないながらも反応が返ってくる足だ。

足の更に向こう。ウィルオウイプス（嫌われ者）と呼ばれた緑男が、火の点いていない煙草をくわえて数度頷く。

新しい足の各部をチェックするためか、爪先から太腿までをなで回し頬すりまでした。勢い的には舐め回しそうなテンションで、ひゃっほおおおお、成功だぜえい！！　と盛大に騒ぎ出した瞬間、首の後ろを何かに射抜かれた。

それは銀色の医療具　メスであり、服を貫通して壁に縫い止める軌道だ。

え？　とウィルオウイプスが首を傾げている間に、両腕と両足の裾を同じように射抜かれる。

「あれ？　ちよっ！　これが噂の死亡フラグか！？」

「人聞きが悪いね。ちよつと危険なダーツゲームだよ」

「ああ、やめて！ 新しい世界とか見えちゃいそう！！」

「ははははは。やってみるかねアヤカ君」

全力で首を左右に振って、以降はそちらを見ないように努力する。痛い。痛いけどこれはこれで、いやそんなことはなかった！！なんて声は、少しも聞こえない。

「そういえば名乗り忘れていたが、七海八雲というのが私の名でね。階級は大佐。着任は少し先になるが、一一〇小隊の隊長になることが決まっている。ああ、安心したまえ。あんな無能のところにあやカ君を置いていたりはしないよ。その足のリハビリとデータ収集の名目で、保護観察扱いにしてあるからね。新一一〇が立ち上がるまでは、私のところに来るといいよ。そのときに母親の方も紹介しよう」

では移動だと楽しげな八雲に抱き上げられ、体が僅かな浮遊感にさらされる。ふわりと心地よい感覚の後に続くのは、お姫様だっこによる運搬だ。

こんな事はされたこともないので、なんだか気恥ずかしくなってしまう。首を竦めて、熱をおびた頬が見えないように顔を伏せる。

「おいおいおい、ちよつと待て。あんたせめて、この状況くらいは解除してつてくれない！？ というか、途中経過とかどうする気だよっ」

「ああ、この『韋駄天』の事なら資料をコピーしてあるからね。今夜中に目を通して、リハビリの内容を考えるよ。それでも問題が起こつたら、そのときは呼び出すけれどね」

「コピーって……それ一応、開発局の機密なんだがなあ」

「問題ないよ。どうせ上はこんな物に興味はないし、何より雁首そ

ろえて無能が多いからね」

「もの凄いいこというなあ。ついでに、俺の開発した『韋駄天』けなすのやめてくれる？」

そんなつもりはないよ、と八雲はウィルオウイプスの近くへ歩き出す。彼が歩くことに、波間を漂っているような気持ちになった。ゆっくりと上下に揺れる動きは、赤子をあやすときのそれに似ている。

「こんなくならない戦争で、無くしてしまった四肢の代わりに提供する君をけなすはうがね。多くの灯火を集めるジャック・オ・ランタン、上層部から嫌われる救いの火種。今後も大いにやってくれたまえ。素晴らしい出来の手足を、誰かれかまわず与え続けるといいよ。そんな君を、私は誇らしいからこそ支援しているのだからね」

不意に、二枚の楯が降り注いだ。

それは八雲とウィルオウイプスの間に割り込み、刺さっていたメスを全て弾き飛ばす。小さな金属音と共に拘束は外され、地面に着弾する直前で旋回する挙動へと切り替わる。

両側を廻り込むように背後へ流れ、合流する足音の元へと帰っていった。

「まだこんなところにいたの？ 人に戦後処理させといて、優雅に女の子抱えてるなんて。浮気？」

「話が飛躍しすぎてないかね？ それに、どちらかと言うと隠し子だよ。今日から、我々の娘だね」

あら、それは素敵だわ、とどの基準で判断しているのかわからない女が近寄ってくる。

背中から二本のアーム、その先端には鉄板が二対。まるで鋼の翼を背負う様に立つ女は、にっこりと微笑んで頭を優しく撫でてきた。

「私、男はこの莫迦だけでお腹いっぱいなのよね。娘が欲しかったの、それもいっぱい。あなたが、その娘一号よ」

新しい両親と新しい両足。手に入らないと思ったものが、一気に手元へ流れ込んでくる。

許容量はとづくに超えているし、手に入れた幸せを実感する余裕すらない。それでも溢れ出した涙は、先ほどまでと違う意味を持っているのだろう。

もう苦しくないし、怖くてたまらなかつた涙を流しても辛くない。

「ちょっと早くなつてしまつたが、彼女が母親だよ。しばらくは三人暮らしだね。イベント的には家族旅行で絆を深めるところから始まり、お父さんの洗濯物と一緒に洗濯しないかというとところまで行けそうだよ」

「ホント、八雲は莫迦ね。洗濯物なんて、分けるに決まつてるじゃないの。もちろん、自分のは自分であらうのよ?」

「自らの嫁から拒否られた場合、夫はどこへ行けばいいのだろうか……」

さあ行きましようと思視を決め込んだ女の後、肩を竦めて八雲が続く。

安らかなゆり籠と、耳に心地いい鼓動が意識を満たす。眠気はすぐにやってきて、次に起きた時は三人揃って川の字に寝ているのだろうか、などと幸せな気持ちが始めていた。

さっきの口ぶりなら、まだ家族は増えるのだろうか。まだ見ぬ兄弟・姉妹を思い描いて、無抵抗にまどろみへ落ちていく。

意識の遠いところで、もう来るんじゃないか！と誰かが叫んで

いた。

隊長&オールマイティ

ななみ やくも
七海八雲

変態 愉快的な男 お父さん

階級、大佐

現・副隊長

くじょう あき
九条晶

回し蹴り系男勝り少女 九条家令嬢

階級、少佐

元・副隊長

???

お母さん 鋼の翼

階級、?

フォワード1

坂本アヤカ(さかもと あやか)

迎撃キック 接近戦最強 義足 最初の娘

階級、伍長

通信士

???

衛生兵・補佐

???

フォワード2

???

陸上特殊車両運用兵士&メカニック

???

航空特殊機体運用兵士&メカニック

???

後方支援1

???

後方支援2

???

衛生兵長

飯塚ナツキ(いいづか なつき)

三つ編みの常識人 晶の同期

階級、曹長

？ 通信士、真衣・プロセッサの場合（前書き）

諦めの気持ちがある

諦めない男がいる

正しいのはどちらだ

？ 通信士、真衣・プロセッサの場合

少女。真衣^{まゐ}・プロセッサにとって、世界とはくだらないモノだった。

未だ幼い容姿の彼女は、しかし年不相応の能力を有している。

薬や機械で脳を調整して、身体のおちこちへ小型電子部品を詰め込んでいく事で完成する。感覚を端末に繋いで情報処理演算を可能とした、属に『エリート』と呼ばれる者が有する能力だ。

本来あつた右腕を切り落とし、代わりに端末へ直接接続可能なユニットを搭載した義手が取り付けられたら瞬間。彼女にとって、世界はどうでもいいモノへと成り下がったのである。

人間を止めて手には入つたのは、電子端末と会話をする能力。とても言えば聞こえはいいが、実際は右義手から伸びるコードで接続して頭の中に直接流れ込んできた情報を超高速分割演算しているだけに過ぎない。

私自身が、進化した電子端末なんだ。だから、自分を引き取りに来る『持ち主』がそのうち現れる。そう思って、彼女はその瞬間をずっと待っていた。

+

「ん？ んん？ つまり、ここを押せば通信プログラムが立ち上がって、大規模通信環境における情報のやり取りができるわけだな？」
「少佐、ネットって言葉知ってる？ 流石にこれはアレだよ？ ちよつとやばめだよ？」

人差し指で恐る恐るキーボードを叩く晶に、真衣は眉根を寄せた

表情で答えた。

このご時世になっても端末を触った事がないらしい莫迦　もと
い現副隊長を見兼ねた八雲が、最低限の手解きくらいはしておいて
くれないかとやってきたのが数時間前。

ようやくネットという物の概念を理解させたのだが、彼女は真衣
の予想を大幅に超えるほどの手間を要求してきた。

ぶっちゃけ、こんなのはさっさと終わらせて書類の整理や積みゲ
ーや趣味のハッキングに向かおうとしていたわけだが。そんな予定
を考えながらの片手間ではどうにもならない事ということを理解す
るまでに、それほどの時間はかからなかった。

むしろ、今ここまで理解させられた事は一種の奇跡かもしれない。
私って超凄い！！　と過信出来るくらいにはとんでもない労力だっ
たわけである。

「ふむふむ。『ばそこん』というやつは奥が深いな。この『ねつと』
を使うと地球の裏側にいる誰かと連絡が取れると聞いた。電話でよ
くないか？」

「わあ、せっかく教えてあげたのに電話とか言ってるこの人。ねえ
ねえ、少佐。ぶっちゃけ、今まで報告書とかどうしてたの？　私的
には、データ提出が主流なのに疑問でならないんだけど」

「ああ、書類？　私の所には、紙媒体の重要書類しか回ってこなか
ったな。何故か、前の部下たちはとても多忙だったけど」

見た事もない部下の人たちに、思わず真衣は労いの言葉を投げそ
うになってやめた。良く考えてみたら彼らは今、問題の上司がいな
くなって仕事が楽になっているということである。

どうしてさっさとモバイルの使い方くらい教えなかったのか。あ
とで、逆恨み的にウイルスでも投入してやることを決心しながら視
線を正面に戻す。

そこには少し目を放していただけにもかかわらず、画面を埋め尽

くすほどのエラーウィンドウを発生させている莫迦がいた。

何をどうやったら、そんなにも器用極まりない事が出来るのか教えてほしい気持ちを抑え込む。

ともすれば、これを観察する事によって新ウィルスとか作れるかもしれない。そうポジティブに考えつつ、真衣は鋼の義手で晶の頭を殴った。

アヤカの足と違って接続端子である精密機器の塊だが、とてもいい音を隊舎内に響き渡らせる。

十

彼女ら『エリート』達が勉強し、その様子がそのまま能力のプレゼンテーションになる場所 『スクール』。

月に一度。そこでは授業参観が行われており、沢山の軍人や政治家などが集まって来る。選別して、優秀者を引き抜くための会場である。

つまるところ、この学び舎はショーウィンドウも同然の施設だ。ガラス壁の中でディスプレイされている人形を、一つ一つ吟味して買い物リストに書き込んでいく。

ここは、そんな優しい監獄だった。

その『スクール』の中でも、指折りの『エリート』である真衣が売れ残っていたのは、一重に彼女の高性能すぎる故の欠陥が原因だろう。

あまりにも致命的な、それでいてどうしようもない欠点。自身を人形だと思っているからこそ、どうしようもない破綻がそこにはあった。

当然、彼女ら『エリート』にだって人権はある。否、薬品や部品への適合率の事を考えると、その絶対個数が少ない彼女らは厳しい

権限によって護られていた。

機械を埋め込まれた人形ではなく、機械を埋め込んでまで社会へ貢献してくれている人間という扱いで『エリート』たちの安全は保障されている。

しかし、それを彼女は受け入れない。それどころか、出されたオーダーは拒否の一つもなく実行してしまう。例え、それが処理能力を大幅に上回っている為に脳細胞を潰してしまう様なオーダーだとしてもだ。

本来ならそう言った無理なオーダーを拒否し、絶対個数の少ない『エリート』を保護するための権利が働かない。それらが自己申告でしか行使出来ない権利だからこそ、自身を扱われるだけの人形と認識する真衣・プロセッサには適応されない権利なのである。

これでは、自殺志願者と同じだ。そんな面倒な人間を欲しがる部署は無く、また『エリート』を過剰労働で殺した。などという不名誉な記事を書かれたくない政治家も敬遠していた。

ある意味で、彼女はとても有名で有能な『エリート』だったわけだ。

「初めまして、真衣・プロセッサ君。私と一緒に、世界征服とかしてみないかね？」

そこまで有名だった彼女に、わざわざ話し掛ける物好きなど殆どいるはずもなく。突発的で唐突に湧き出た男の存在は、彼女を少なからず混乱させた。

意味不明な存在が、彼女の通常処理能力を大きく上回っている。どんな人間で、どういう立場の生き物であるかすら読みとることが出来ない。

答えぬ少女に、正装の軍服を着た男は疑問の声を出す。

「おや？ おかしいね。君は、とりあえず言われたことに『YES』

と答えるイエスマン　もとい、イエスちゃんだと聞いたんだが……
…今、世界中のキリスト教信者に喧嘩を売らなかつたかね？　私は」

会話が成り立たない。

そもそも真衣が口を開いていないのだから、会話になるはずもないのだが。しかし、そんな事はお構いなしに男は喋る。

世界屈指の聖人キリスト様は、その御業で人々を救いたもつ。という話から、何故か今の世界情勢の話になり。それは「まあ、ぶっちゃけ世界情勢とかどうでもいいのけどね」と無責任な言葉で締められて、勢いを失わぬまま何故か昨日食べた美味しい茶菓子の話へ移行する。

ここまで無秩序に超人的な速度で喋られたのでは、情報の演算どころの問題ではない。人類最高峰の演算能力を有する『エリート』の中でも指折りの存在は、話の要点が理解できずに思考が停止していた。

どうしていいか困惑したまま、目を白黒させている少女へ手が差し伸べる。なぜそんな流れになっているのか、全くと言っていいほどわからない真衣は言葉を聞く。

「と言うわけでね。うちの隊へ引き抜かせて欲しいのだが」

「何が、と言うわけでなのか。今の会話の中からは、全く理解できない」

「つまり、アレだよ。聖母マリアの受胎が核融合であぼんして、後のゲオルギウス君がオリンピックピック槍投げで優勝わーい。という話だね」

「……キリスト教、そんなに嫌いなのか？」

気のせいではないかね？　と首を捻った男は、そのままはの音を連ねて笑う。

やはり、話の意味はわからない。

最初の世界征服というのが嘘なのは明白だが、何を持って自分のような敬遠される個体を欲するのかが彼女にはわからなかった。

絶対個数が少ないとは言え、未だ配属の決まらない『エリート』など他に沢山いる。そちらを起用する方が、部隊運用が楽なのは本人でも知っていることだ。

だが、そんな真衣の困惑すら無視して男の言葉は続く。

「中途半端で凡庸な能力を、我々は求めてないものでね？ 手続きは終わっているし、後は君から了承を得るだけなのだが？」

どうだろう？ と問うた男の言葉に真衣は迷う。そして、迷った事実には驚いた。

健康診断も、定期テストも、限界突破演算能力実験も。この男と逢う直前までは、全てに「はい」と答えていたというのに。そんな自分が、ここにきて何故迷っているのが理解できない。

どうかね？ と答えない彼女に、男は再度問い掛けを放つ。きつと、答えがあるまで何度でも同じ事を問うのだろう。

「……か、考える。次の『授業参観』までには答えるから」

ようやくと彼女から出た言葉が、それだった。

何て不明瞭な答えだ。と内心で齒噛みする真衣とは反対に、男は大して気にもしていないらしい。懐からタッチパネル式の小型端末を取り出して、スケジュールの確認を始めている。

次の授業参観は五日後か。書類を一日で片付けて、指揮系統の統合を。としばらく呟いていた男は、頷き一つで操作を終わらせた。端末を懐へ仕舞い、片手を挙げ。

「では約束だね。色よい返事を期待しているよ」

軽い挨拶を済ませると同時、男は全力疾走でその場から離れていた。
半ば跳躍の連続を思わせる高速移動は、ギアを三段飛ばしくらいの勢いで疾駆の領域に達する。

十

最初こそそうでもなかったが、最近では求められる事など全くなかった。故に、突然自分を求めてきた男に困惑したのだと真衣は判断する。

どうすればいいのか迷いに迷い。わからない事を勉強する為、ネットに潜って男の個人情報を探し出した。

名は七海八雲。階級は中佐だが、あと一週間で大佐への昇級が決定している。第一〇小隊の引き継ぎ真っ最中で、隊員を集める傍らに仕事をしているらしい。

それでも着実に戦果を挙げ、デスクワークをこなし、人脈と情報網も完璧に構築している。正しく、天才が努力を重ね昇華した存在と言っても過言ではない。……たぶんないと思う。

そんな人物が、やはり自分のような個体を呼び寄せる意味がわからない。

本当にどうしようか？ そう悩みの迷路に突入しそうになった瞬間、それは偶然に見付かった。

上層部に提出されたらしいスケジュールデータに、八雲の名がある。それも授業参観の日を跨いで、翌日まで『反政府ゲリラ掃討』と書き込まれたデータがだ。

見つけた瞬間、真衣の肩から力が抜けるのを感じていた。

戦闘地域は遙か北の地、シベリア。どう足掻いても、七海八雲は授業参観に出席する事が出来ないだろう。それが安心なのか残念な

のかはわからないが、少なからず肩の荷がすっかり解消されたわけである。

果たして参観日当日。そこにはボロボロの戦闘服を着た七海八雲が、他の正装した人物たちの不審な視線も気にせず、両腕を組んでど真ん中に立っていた。

正装用の軍服ではないそれは、ウェットスーツの上から装甲を取り付けた七海八雲専用の戦闘機動補助スーツ。

通信機付のヘッドギアと、固有武装らしい棺桶を思わせる鋼の箱を廊下に置き。やはりボロボロのコートでスーツをある程度隠しながらの出席。

目の下には隈がある。ここへ来るためだけに、相当な無理をしたらしい。

絶句。声もでない真衣を見つけた八雲は、本人に近付き問う。

「私の隊に来たまえ、真衣・プロセスサ君。流石に一日で鎮圧は出来なくてね、一応の膠着状態を作ったここに来た。当然、長くは保たないだろうね。故に、即刻の返答を貰えないだろうか？」

問いの声こそ相手を急かさぬように気遣った速さで紡がれているが、焦っているのは本当らしい。よくみると額には薄く汗が浮いていて、肩も呼吸を押し地つける様に浅く上下している。

イエスでもノーでも、聞いた瞬間に行動が起こせるよう身構えているのだろう。それが証拠に、起動補助スーツのバックパックも動力がオンになったままである。

正直、八雲が来ないと思っていた真衣は答えらしい答えなど用意していなかった。

つまり、思わず「行きます」と答えてしまったのは、本人にも与り知らない場所で起こった反射運動の賜物だ。

自身で言った言葉に、えっと声を漏らして困惑し。それでも、視線は何とか八雲へと合わせる。

彼の返事は頷きだった。
深くゆっくりと首肯して、口を開く。

「では、今すぐ能力を借りよう。少々厄介な相手とやり合っているんだがね。作戦の伝達が悪過ぎる。優秀なオペレータが必要だよ？」

必要とされる感覚を久しく思い出した真衣は、ただ力強く肯定の言葉を口にする。

それが、幼い少女が生きる意味を見付けた瞬間。同時に、八雲の家族になった瞬間である。

十

「と言うのが、この隊の通信士。真衣・プロセツサ軍曹との成り立ちなのだがね？ 晶少佐。君から聞いてきておいて、居眠りはどうかと思うよ？」

八雲が吐息して呆れる先。暖かな日差しを浴びている中庭で、九条晶はうつらうつらと首を落としていた。

名を呼ばれて、ようやく意識を覚醒させつつ。

「ん？ すまん。あまりに嘘っぱいのでつい、な」

「ふ、む。確かに。彼女は随分性格も明るくなったからね。そう思うのも無理はないのだが……ああ、そうそう。あの時、真衣君とは一つ約束をしてね。性格上無茶をしてしまう彼女を」

隊長隊長っー！！ と不意に少女の声が割り込んでくる。説明を中断した八雲は視線を巡らせ、声の主を視界にとらえた。

隊舎の廊下、その窓から顔を出しているのは話題の真衣・プロセッサである。

ぶっちゃけ幼女と言っても過言ではない彼女は、窓からギリギリ顔を出して手を振り。

「個人情報ってねーっ！一回ネット上に流出すると、完全回収は不可能なんだよーっ？」

「了解したっ！約束の事は伏せておくから、勘弁して欲しいものだねっ！」

もう一度だけ元気よく手を振った真衣は、そのまま窓の向こう側へ消えて行く。

唯一第三者として見ていた晶は、眉根に皺を寄せ。

「今、どうやって私たちの話題を嗅ぎ付けた？」

「さてね。そういうネットワークでもあるのだからと思うよ？あと、この場所がばれているということは少佐も逃走劇は終わりだね。逃げるのはいいが、諦めて真衣君にネットの指導を受けてくるといいよ」

嫌そうに表情をしかめる晶に、八雲は真衣が消えていった窓を指し示す。そこにはいつの間にか一枚の紙が貼ってあり、短いアドレスと一緒に「解除OSのダウンロードサイト」という文字が書き込んであった。

なんの事だ？と首を傾げた動作に連動して、不意にモバイル端末の着信音が鳴り始める。

音源を探るように二人してポケットを漁り、沈黙しているモバイルを八雲が取り出したところで異変が起きた。

着信音が、何故か最近流行りの日曜朝十時からやっているアニメのオープニングテーマに切り替わったのである。

え？ という声は、二人とも同時だった。

ようやく自分のモバイルを引つ張り出した晶が、たどたどしい手つきで何やら操作しているが。音は止むどころか、作中でキメ台詞や技名を交えたパワーアップバーションへと進化していく。

「おお、なかなか手が込んでいるね。こんなMADを短時間で作るとは、流石だよ」

「え？ ちょ、感心している場合じゃないだろう！ これ、どうやって止まるんだ？ なっ、なんでこちらからの動作が全部エラーになるんだ！？」

これも授業の一環なのだろうねえ、と思いながら八雲は笑う。

まずはURLを入力しなければいけないという事実^に気付くのと、逆上した晶がモバイルを叩き付けて壊すのはどっちが先だろう。そんな事を考えながら、いつの間にか恥ずかしい台詞集に踏み込んでいるBGMを聞きつつ空を見上げた。

雲ひとつない晴れ渡った青空の先。大気圏も突き抜けた場所から見降ろす衛星を介して、そんな状況を見ている真衣も思わず笑顔がこぼれていた。

隊長&オールマイティ
ななみ やくも
七海八雲

変態 愉快的な男 お父さん

階級、大佐

現・副隊長

くじょう
九条晶 あき

回し蹴り系男勝り少女 九条家令嬢

階級、少佐

元・副隊長

???

お母さん 鋼の翼

階級、?

フォワード1

坂本アヤカ(さかもと あやか)

迎撃キック 接近戦最強 義足 最初の娘

階級、伍長

通信士

真衣・プロセッサ(まい)

電腦幼女 指折りの『エリート』 腹黒

階級、軍曹

衛生兵・補佐

???

フォワード2

???

陸上特殊車両運用兵士&メカニック

???

航空特殊機体運用兵士&メカニック

???

後方支援1

???

後方支援2

???

衛生兵長

飯塚ナツキ(い いづか なつき)

三つ編みの常識人 晶の同期

階級、曹長

？ 衛生兵補助、暎愛琳の場合（前書き）

もてはやされ

貶められ

次は、何を求められるのか

？ 衛生兵補助、暎愛琳の場合

初めての称号は天才児だった。

齢にして十歳と少し。そんな低年齢で、一般的な教育をすべてパスしたときに与えられたものだ。

よくアニメに出てくる天才と同じ事をしたかっただけで、特に目的があつたわけじゃなかったけど。周りにいる誰もが私を誉めて笑顔になる。そんな風景を見るのは悪い気がしなかった。

父と母も心から喜んでくれた。そして、なんでも望む物を用意してくれた。

何を言ってもダメとは言わない。眉根を寄せて、口の端をぎこちなく歪めて笑いながら誉め続けてくれた。

そうして、しばらく過ごす内に二度目の称号はやってきた。

天才という単語の前に『狂喜の』という言葉をつけ加えることによつて。

十

世界中が統合され、軍が一つに集束され。そうなれば、その軍は何と戦うのか。

テロリスト、レジスタンス。そして、友軍だ。

規模の大きな組織が一枚岩でない以上、派閥間の争いは当然のように存在し。そのどうでもいような争いに軍が巻き込まれる。

先週は共同戦線を張っていた第一一七特殊機甲隊が、今や第一一〇小隊と激突しているのだから良い例だ。

爆音が響いて、起伏の激しい高野で誰かが吹っ飛ぶ。

絶叫も掻き消したそれは、第一一七特殊機甲隊が保有する固有兵器の威力発揮。超大型天候操作ユニットを使い、頭上から雷の一撃を見舞う代物。まるで神の鉄槌でも下すかのように見えるそれは、コードネーム『デウス・マキナ（神の権威）』と呼ばれる兵器だ。

「全く、あんなものをバカス力撃たれたんでは地形が変わってしまったうね。ナツキ君、四時の方向に負傷者！！一〇四の役立たずだが、助けて恩を売っておきたまえっ！！」

はい。と遠くから微かな返事があるのを聞いて、八雲は頷く。

続けざまに手信号を送りへ送って、リアルタイムに更新される戦況報告を端末で見つめながら。

「で？ 愛琳君。瞑愛琳君。^{メイ・アイン}傷の手当ては終わったかね？」

声が放たれた方向は、彼の真横。セミロングの黒髪をサイドアップで纏め、僅かに目尻を下げた少女がいる。腰に簡易医療キットの詰まったポーチを装備する彼女は、衛生兵ナツキの助手という立ち位置だ。

白いブラウスにショートスカート。まるで、学校の制服のようなそれを着て包帯と格闘する姿は非常に微笑ましい。

肩を抱き寄せ、流れ弾から愛琳を護りつつ八雲は思う。自分に来ない事を理解して、この子はとても楽しそうにしていると。わからない事があるからこそ、まだまだ上を目指して行けると。

不意に背後から小石が飛んできた。コツンと頭へ着弾したそれに応えて振り向けば、紅の双眸がこちらをじっと見ている。どこか咎めるような視線である事に苦笑を返すしかない。

愛琳と同じ服装にスパッツを履き、脚にはいつもの編み上げブーツを履いている。右肩に装備された防衛装置がフル稼働していた。手信号が来る。内容は、いちやっついてないで仕事しろ。

ふむ、と呆れの混じった息を吐く。答えはやはり手信号で作り。

『それでも、怪我人なんだがね』

『死ね』

なかなか辛辣な答えが来たね、と頬を掻きながら待つこと数秒。罪悪感のせいかな、こちらを見ようとしないアヤカから追加の手信号が来た。

『ごめん。やっぱり今の無し』

思わず、失笑が漏れる。

微笑ましい限りだと頷いて、視線を隣へ戻す。もはや包帯に絡まっっている愛琳を見て、更に二度頷く。

これなら問題はない。まだ、この一〇はやっていけると確信を得る。

新しい人材を放り込んだことで、それぞれに戸惑いはあるだろう。しかし、その程度で揺らぐような娘たちではない事を再確認した。

「ならば、私もそれに応えなくてはいけないね」

く、と喉を鳴らして笑う。

笑って楽しく、傍らに置いた武装。棺を思わせる鋼の塊を撫でた。

+

やったことは単純。死んだ動物を生き返らせたただけ。いや、より正確には『生き返ったように見せただけ』である。

実際は死んだ組織の代用になる機械を注ぎ込み、それまでの行動パターンをデータ化して再現しただけだ。

犬や猫程度なら、生きていた頃と変わりなく動き回る。

機能しなくなった脳を無視して、体は活動を続けていく。

何が違うのか。これまでと同じように動けば、それが望ましいはずである。

どうして誰も喜ばないのか、まったくわからなかった。

「天才少女にもわからないことがあるのかね」

声が降って湧く。

広い研究室で一人だけ置き去りにされ、黙々と研究する事だけを求められる日々。もう、実験結果すら書面でしか確認されなくなつた頃。

その声は、不意に割り込んできたのだ。

「わからない、と思うのはいいことだね。それは、もっと、と願うことと同義だよ。欲張り、まだ足りないと求めることでもある」

にこりと、それは笑う。

わからない。誰もやってこない場所に、なぜそれが来たのか。どうして楽しみに喋っているのか。

この思いも、もっとを願う意識なのだろうか。

「楽しく嬉しいから笑うし、君に会いたいから来ているんだよ。それは、わからないではないね。きつと、わかりたくないの分類だろう」

そして、それは手を差し伸べてこう言う。

ほら、と招きの声を発しつつ。

「もっとを願うなら、手を出したまえ。私もまた、もっとを望み、そうして踏み込んでいく者でね。旅は道連れと言っし、君も一緒に行こうじゃないかね」

無茶を言う。

「いったい、どれだけの保護規約がこの部屋に存在するか。この男が知らないはずはない。

ここに入るだけでも、徹底的なセキュリティチェックを受けているはずだ。それがイコールで、檻の分厚さを物語っている。

出られるはずがない。ずっとこのまま、望みもなく一人だ。

「君は昔の私と、ほんの少しだけ同じだね。そして、そんないじける子供の扱いを、私は既に身を持って教えられたよ」

刹那、室内の照明が真っ赤に切り替わる。警戒の意味を持つ色が、部屋の中を満たしていた。

疑問を持つ暇もない。

あまりに急展開のまま、入り口のドアが吹き飛ぶ。更に黒の棺を思わせる物体が放り込まれ。

「そんな可愛い娘を、あなたみたいなやさぐれと一緒にしちゃダメよ?」

ドアの向こう、銃弾の雨を防ぐ誰かがいた。

声は女のもので、破碎の音も同時にやってくる。

わあ、と蹴散らされる兵士たちの声も混じり出した頃。黒の棺を肩上に担った男が、もう一度手を差し伸べてきた。

「この施設は、第六五〇総合研究大隊の直下施設でね。大義名分と、

利益の損得さえ発生すれば攻撃可能施設なんだよ。そして、ここを全て灰にすれば君を縛るものはなくなる。とりあえずはそこまで、出来るならその先まで、一緒に行こうじゃないかね」

出ていけるのか。ここ以外の場所へ、望みのままに。だが、そもそも願ってまで行きたい場所がどこにあるのだろう。

迷い躊躇う手が、中途半端に虚空を舞い。自由の重さに耐えられず、墜落しそうになった。

手が来る。差し伸べられていた手が、こちらの手を強引に掴む動きだ。

「一緒に来たまえ。損はさせないし、きっと楽しくなるよ。なんせ私の願うもつとは、もつと楽しくだからね」

柔らかく笑む男の肩、担われていた黒い棺が展開をはじめている。

展開前の状態で、既に二メートルほどの全長があった。それが今、中心線を軸に上下に分かれて展開していく。

まるで、折りたたみナイフのようだ。

半円を描く軌道で下側が回転し、二〇センチほど戻るようにスライドすることで上側へアジャストする。

砲だった。気付けば、二メートルの棺が三・八メートルの長大な砲へと変化していく。先端部が更に割れ、獣が口を開くようにしてスリットを作り出した。

最早、それがただの砲には見えない。フレームに彫られた銘ピナカトリシユーラの名の通り、槍のようにすら見えてくる。

砲にしては長く大きすぎ、槍にしては幅と分厚さがありすぎた。どちらでもない中途半端な兵器が、軽々と振られるだけで天井を削り崩す。

「さあ、楽しんでいこうかね」

同時、砲撃を放つ。

膨大な熱量が、空間を一閃した。

+

「真衣君。ユニットの位置は特定できるかね？　こちらも、固有兵器を展開して対抗しようと思う」

『ちよっと待つてくださいね、隊長。なうろーでいんぐー！』

八雲の通信に、ヘッドギアのスピーカーから幼くも明るい声が応えた。

一定間隔で『なうろーでいんぐー！』と言い続ける向こう。平坦な囁きの音で、ハッキングだとか衛星画像の解析などという単語が聞こえてくるが。これらを意識的に無視して、その結果を待つ。

未だに、真衣の無茶をする癖は治っていない。しかし、それも通信車両の容量を抑えることで予防はしてある。

一度に扱える情報の量を制限してしまえば、彼女の脳に不可がかかることも抑えられるし。本人の演算速度に変更を加えるわけではないため、他の『エリート』とも互角以上にやりあえるはずだ。

子供が楽しむのを邪魔しないように護るのは、親として当然の務めだと思う。何事もやり過ぎは良くない。適度な注意に留めて、自由を奪わないよう気を付けるべきである。

いい父親っぷりだという自覚を得つつ、TPOをわきまえているので表情には出さない。今は仕事の真っ最中だ。

愛琳の医療キットから皮膚再生フィルムを拝借して傷口に張りながら。

「愛琳君、治療はもう大丈夫だ。代わりに、いつもの身体強化ナノマシンを頼めるかね？」

「あ、はい。それだったら、最近新型を作ってみたので試しますね」「せめて疑問してくれないかね。前回のように、亜音速機動の代償として膝間接の粉碎とかは嫌だよ？」

「ばっちりです。私の祖国では、三千年の歴史は偉大なんだそうですよ！」

ポーチからアンブルを出した愛琳が、満面の笑みでそれを差し出してくる。

医療系ナノマシンの確立は一〇年前からとか。それをいつも言うて、成功率は五分五分とか。

この際、その辺りは総無視しようと思つた。言うだけ、自分の恐怖心を煽るだけだ。

「信じているよ愛琳君。医療系ナノマシン確立の立役者。更には、そこから発展した身体強化系ナノマシンの第一人者として」

「期待には応えちゃいますよ」。と云うことで、ぐぐつとどろぞ

確か、意を決するときには「ナムサン」とか言う人の名前のような呪文を唱えるといいとか祖父が言っていたかね。と呟いて、ナムサン！！ と叫んでから、八雲はアンブルの中身を空にする。

瞬間。一秒が二〇倍に引き延ばされた。

アンブルの中身は感覚操作系のナノマシンだったらしく、景色も動きも自分の行動でさえもスローに感じる。それは音も動議であり、目の前で喋っている愛琳の言葉は意味が理解できない。

思考が鈍っていないのは、ナノマシンに思考高速化の作用が付与されていたからだろうか？ と首を傾げながら、手信号を使った。

『悪いが、何を言っているのかサッパリでね。世界共通語を話してほしい』

『あ、理論通りの反応ですね。思考が追い付いているなら成功です。これで、慣れれば弾丸とか余裕で避けられる設定です』

『身体能力に変化はないのだから、それは無理だと思うがね？ あと、意志疎通が非常に面倒だよ？』

あはは、と苦笑いしているらしい愛琳に吐息で返答。それと同時に、端末が通信を受け取って震えた。

開いた画面には敵勢ユニットの正確な位置と、状況は把握していきまずと記入されたショートメールが届いている。

真衣・プロセッサからの報告だ。

相変わらず、どこから情報を仕入れているのか不明である。しかし、現状ではとても心強い。

端末をチャットモードにして、試しに誘導を頼むと手信号を送ってみた。

どうやって見ているのか、強制接続してきた『真衣ちゃん可愛いお』と表示されるアイコンが了解の言葉を書き込んでくる。

頷き、棺を思わせる鉄の塊を担ぎ上げた。

第一一〇小隊の固有兵器。二柱の内の一機を、八雲は展開し始めた。

既に、この戦線の勝敗は決定している。

隊長&オールマイティ

七海八雲ななみ やくも

変態 愉快な男 お父さん

階級、大佐

現・副隊長

九条晶くじょう あき

回し蹴り系男勝り少女 九条家令嬢

階級、少佐

元・副隊長

????

お母さん 鋼の翼

階級、?

フワード1

坂本アヤカ(さかもと あやか)

迎撃キック 接近戦最強 義足 最初の娘

階級、伍長

通信士

真衣・プロセッサ(まい)

電腦幼女 指折りの『エリート』 腹黒

階級、軍曹

衛生兵・補佐

暎愛琳めい あいりん

天才 中国三千年の末裔 マッドサイエンティスト系衛生補助兵

階級、上等兵

フォワード2

???

陸上特殊車両運用兵士&メカニック

???

航空特殊機体運用兵士&メカニック

???

後方支援1

???

後方支援2

???

衛生兵長

飯塚ナツキ(いいづか なつき)

三つ編みの常識人 晶の同期

階級、曹長

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4163y/>

第一一〇戦記

2011年11月23日23時47分発行